

移動する視点、 通路の彫刻

2023.7.23 [SUN]



11.23 [THU]

メトロ銀座ギャラリー

東京メトロ 日比谷線
銀座駅コンコース
B7・B8 出入口付近

移動する視点

この空間は、
多忙な人々・多様な目的の人々・様々な世代の人々が、
通り抜ける場所にある。
「広場の彫刻」ではない、「通路の彫刻」は
可能だろうか。

MAU

主催：
公益財団法人 メトロ文化財団

企画監修：
武蔵野美術大学彫刻学科研究室



UNO ARISA

HE ZIYU

SAITO MIHO

本展は、この場所（銀座）この空間（ガラスケース）から新たな彫刻の可能性を考える「実験」です。メトロ銀座ギャラリーの空間を念頭に、彫刻学科研究室がテーマを設定。個性豊かな表現者たちが、学生の中から出品作家を推薦する形で応答しました。多彩なアプローチから選ばれた作家たちは、この実験場で何を試みるでしょう。ここからはじまる、表現のかたちにご注目ください。

鶴野 亜梨沙



略歴
2001年東京都生まれ。2023年「日本大学芸術学部美術学科2022年度卒業・修了作品展」（日本大学芸術学部、東京）。2023年「令和4年度東京五美術大学連合卒業・修了制作展」（国立新美術館、東京）。

《ずっとこのまま》2022年

作家コメント

石を彫るという行為にどのような意味があるのかを日々考える。石にノミを打ち付けると小さな凹みが生まれる。この凹みを無数に彫り形を作り上げることで、作品の表面にある空間はなお一層広がっていくと私は考える。また、その小さな凹凸から作られる表面の形は自分の行為と直接的に結びついていて心地よい。自分の体の内側と外側の感覚の違いを意識することは、石の内側と外側の境界を見ているようである。この曖昧な境界を探るように石を彫っている。

推薦…丸山 富之

銀座4丁目地下通路、ガラスに囲まれた空間に石の彫刻を置いてみる。その場所はショーウィンドウ的である。そのようなところではまず人々の視覚に訴えることが目的となる。目立つことが重要なのだ。近頃彫刻においても視覚が優先されショーウィンドウ的なものが多いようにも感じられる。

鶴野さんの彫刻はそうではない。

鶴野さんはとても誠実に石をたたく。四角い石をたたくと角がとれて丸くなる。四角い石が山から川を流れて里に着いたら丸くなるに似ている。この石は大河をゆったりと流れてきたかのように。ところどころたたかずに石肌を残している。つくりながらそんな気分になったのだろうと想像する。流れてきた石はある場所にとどまり安定する。そこに上からノミを打ち入れる。長時間打ち続けるとノミは石に空洞を穿つ。空洞は作者の身体をすっぽりと包み込む。視線は石の回り、石の内側、石の中の空洞をめぐる。丸い石は作者の時間、作者の身体、そのときどきの気分、情動の見え隠れするのを封じ込んでいる。

この触覚の石は心に染み入り、肚の底に落ちる。

銀座を歩く大勢の人々のほんの何人かの心に染み入り肚の底に落ちるとい。彫刻が伝わるということはそういうことなのだろう。

何 梓羽



略歴
1990年中国四川省生まれ。2017年までは北海道大学大学院にて国際広報メディア学を専攻し、2020年までは一般企業にて北米／南米における水力発電事業に携わる。現在は武蔵野美術大学造形学部彫刻学科に在籍。

作家コメント

「リアリティー」は、常に狭間の中に存在しているように感じる。それは時に、技術によって構築された虚構が物理的な現実へ侵入しているところにある。または、個人の生活と社会秩序が混同する中にある。そして、個体として感受性が時代の流れやイデオロギーとの同調か引き裂きの中にもある。これらの「異なるリアリティー」に対して、日常に溢れている物質の別の側面を用いて、様々な方法で具現化しようとしている。

《南塔——プライベートモニュメント》2022年

推薦…牛島 達治

何 梓羽（カ シウ / HE ZIYU）さんの表現は、物と事の成り立ちについて重層的に考察することから始まる。それは、形体の持つ機能としての合理性とその合理性に埋め込まれている何らかの秩序に対する問いを見つけ出すとも言える。これは、彼女にとっての創造の基本形だ。

彼女の作業スペースには素材というよりは材料と言ったほうが相応しいレベルのものがいろいろと収集してある。ここでいう素材と材料とは、表現の中でその要素の用途に必然性を確信しているもの=素材、不分明であるものどこか表現に関わる可能性を感じられるもの=材料という意味である。彼女の極めて旺盛な好奇心とそれを裏打ちする表現をめぐる嗅覚とこだわりは、表現に大きく関わる重要な事柄であり、何よりこの様な資質には感心させられる。

さて、これらの思考と選択と判断によって現れてくる物体は、さらに素材と戯れるうちに言語的なコンセプトを凌駕するように存在感を示し始めると、何度もそれを照合しながら鍛錬されてゆく。こう書くといかに構築的なものの出現をイメージさせるが、例えば、金網を使った量感の無い消え入りそうな作品として現れることもある。これらは、接続部や端面の設えがとても繊細だ。最近では、金属パイプを溶接した構造とスタイロフォーム等を使って表現を試みている。

彼女の作品（表現）に通底して感じられるのは、すべては社会の中での出来事であるという意識を前提としていることである。その上で、社会の様々な事柄と自らの距離を創造的な方法で測ろうとしているのだ。この創造的な態度から生み出される表現を通じ、広く一般の人達との間にも様々な対話を生みだして行くだけのポテンシャルを私は感じている。

齊藤 美帆



略歴
2001年神奈川県生まれ。2022年「彫刻一揆」武蔵野美術大学芸術祭 彫刻学科四年有志展（東京）。2022年「小平アートサイト 2022」小平中央公園（東京）。2023年「三人展 日々の穴」ナカノギンザギャラリー（東京）。2023年「逸脱」武蔵野美術大学彫刻学科四年学年展（東京）。

《不明確なオブジェ・フットペダル》2023年

作家コメント

周囲を見渡せば、意味あるもので溢れている。目的や用途、付随する名称、与えられた言葉と情報が氾濫し、意味なく存在するものなど、ほとんどないように思える。けれども、ひとたびそのような言葉達から物体を切り離せば、物達は、それらが何であったかなど関係なしに、ただ確かな物量と質量を持って、“今ここ”に存在している。それらは一体何だったのだろうか。我々は、それらの一体何を見、何と認識していたのだろうか。何かを、何かだと認識する時、そこにしているものは、本当にそのものの姿なのだろうか。

推薦…石川 夏帆

日常生活で見慣れているような、そうじゃないような。齊藤の作品を目の前にした時、自分の立ち位置や、当たり前で認識していたものを思わず確認するような感覚になった。工業製品の一部を想起させるような形態は、何かしらの機能を思わせるが、決して繋がりはさせてくれない。一つの目的のための存在ではないようだ。

齊藤は、人の営みによってつくられる製品や建造物に対して、人の営みの事の大きさと、そのモノの物質自体に釣り合いが取れているのか懐疑的だという。齊藤の制作では、日常生活の中で当たり前で存在しているモノに、機能に対して釣り合いなかたちや大きさ、量感などを見つけては、そのモノにとって、また別の在り方があるのではと、様々なパターンで検証が繰り返される。そのような検証が繰り返されたものは、機能や用途を明確に持つものとして成立することはない。何かを想起させては浮遊してしまうようなそんな存在である。

様々な生活圏の人が行き交う駅構内という空間において、一定の距離をとりながら介入する齊藤の試みは、行き交う人々にとって何を認識するのだろうか。